

# 四肢不全麻痺で寝たきりになったチンパンジー、レオの長期療養

○兼子明久、宮部貴子、渡邊朗野、渡邊祥平、前田典彦、熊崎清則、森本真弓、鈴木樹理

京都大学霊長類研究所人類進化モデル研究センター

## （背景）

霊長類研究所では14頭のチンパンジーが飼育されており、様々な研究で活躍している。2006年9月26日の朝、その中の1頭である『レオ』（当時24歳、♂）が、地面に伏せ、動かなくなっていたのを発見された。前日までは元気であった。意識、呼吸、嚥下、排便、排尿は問題ないが、首より下が動かない四肢不全麻痺の状態であった。大きな外傷は認められず、血液検査、MRI検査および髄液検査をおこない、MRI検査で第一頸椎あたりの脊髄に炎症を疑う像を確認した。しかし、その他には原因を確定する結果は得られなかった。

## （経過）

発症初期には24時間体制で静脈内輸液、抗生剤の投与、ステロイド療法などをおこない、症状はある程度改善した。時間のかかる治療の際は、その都度麻酔が実施され、初めは週に数回おこない、レオの状態により麻酔の頻度を減らしていった。抗生剤の投与は1年にもおよぶ長期間おこなわれ、耐性菌の出現が問題であった。倒れてから約2ヵ月後から、徐々に食物を摂取できるようになって状態は安定していき、両腕の動きは回復していった。寝たきりの状態が長期に及んだため、特に問題となったのが褥瘡、つまり床ずれであった。それ以降、治療と共に褥瘡管理およびリハビリテーションが課題となり、ベッドやケージの改良が毎週おこなわれた。1年後には自ら座れるようになり、治療やリハビリの効果も重なり、褥瘡は次第に無くなっていった。

## （現在）

両足は思うように動かないものの、両腕はかなり自由に動くことができるようになっており、ケージ内を自力で動き回れるようになった。食事量も種類と偏り無く摂取できるようになった。また、問題となっていた褥瘡も無くなり、体調も安定してきたため、麻酔での治療や抗生剤の投与は必要無くなった。さらに、闘病生活が長期に及んだために、信頼関係を築けてきた人がおり、足のマッサージや伸展のリハビリテーションなど徐々にではあるが、おこなえるようになった。また、行動パターンが増えたために、様々な環境エンリッチメントを試み、その行動に応えるように努力している。これからの課題は、未だ動きの悪い両足を含めた体のリハビリテーションである。そこで、現在、リハビリテーションも兼ねた大型の居室を改築中で、運動可能な領域を広げることを進めている。

## （発表内容）

闘病生活は、現在まで2年半にもおよんでいる。その間、多くの人が時間を割いてレオの介護に参加しており、現在も多くの人の助けを借りている。その中でも技術職員は、治療から飼育管理まで幅広く活躍している。そこで、レオが四肢不全麻痺に陥ってから現在までの状況の経緯を、治療及びリハビリテーション、ベッドやケージの改良などを中心に報告したい。

## （謝辞）

レオの介護には教職員の方を始め、関係する研究室の学生、研究員の皆様に多大なご支援を頂いた。特に24時間体制で治療していた時は、通常の勤務時間に加え、夜中の時間にも勤務をして頂いた方がいる。この場を借りて厚くお礼申し上げます。そして、2年半もこの闘病生活を頑張っているレオには敬意を表したい。



図1 四肢不全麻痺を起こす以前のレオ：群れの中でディスプレイをしている所。一番上のチンパンジーがレオ



図2 発表者とレオ：運良く信頼関係を築くことができています



図3 現在のレオ